

海気通信

14号
2018/3/30

発行
千葉市民ギヤ
ラリー・いなげ
〒263-0034
千葉市稲毛区稲
毛1-8-35
TEL:043-248-8723
FAX:043-242-0729
http://business4.
plala.or.jp/g-inage
*バックナンバーをダ
ウンロードできます。

スクープ!! 夜灯ぼし漁の秘密が明らかに!?

稲毛が海辺の街だった頃の年中行事「夜灯ぼし漁」(以下、夜灯)。真夜中の干潟の漁の写真はなく、実は詳しく知られていないこの漁について、幼少期から稲毛にお住まいだった長谷川幸雄さんから貴重なお話を伺いました。

秋の夜長に夜灯ぼし漁

夏が終わり涼しくなった頃、ハゼが最盛期を迎える10〜11月、夜灯は始まります。時期だけでなく、月の満ち欠けもポイントになり、月が明るい満月の夜は人が近づくと魚が起きて逃げてしまうので、真っ暗な「新月の夜」に干潟へ出たそうです。夜灯は漁業権や特別な許可がなくとも参加できましたが、誰でもできるものでもなかったようです。

真夜中の干潟で遭難も

夜灯の日は、だいたい沖合1〜1.5km先まで(現在の国道14号から京葉線稲毛海岸駅くらいまで)潮が引きました。大正時代には民間航空の飛行訓練が行われていたくらいの広大な干潟で、暗闇にカンテラの灯り一つを頼りに歩いて行こうとしたから、危険と隣り合わせの漁でした。晴れていれば岸部の家の灯りを頼りに場所を把握したそうです。問題は干潟が「もやる」曇りの日。家々の灯りが見えないので、慣れていてもどちらかが岸で沖



干潟のときは船が通行するように、溝という水路が掘られていた

① 溝
溝から枝分かれした潮だまり近くでよく獲れた。



② 検見川送信所の鉄塔
霧がかかった夜の唯一の目印となった

なのかもわからなくなる程でした。そんな日唯一の頼りはほのかに光る検見川送信所の鉄塔の灯りだったそうです。

ハゼ、時々エイ

では、夜灯では一体何が獲れたのでしょうか？干潟の海ではお馴染みの「ハゼ」がほとんどだったようです。他にもコチヤカレイ、エイ、アジ、サバ、たまには大きなエイも獲れたとか。

稲毛海岸には、現在の草野水路の辺りに干潮時に海水がまとまって流れる海の道「溝」があり、溝から派生した潮だまりが夜灯の絶好の捕獲ポイントだったようです。潮だまりには、引き潮で沖へ泳ぎそびれた魚たちが取り残されていたのです。また、潮だまりと丘の境目辺りの砂にはエビが潜っていて、名人級ともなると、砂の色の変化やエビの目の光をたよりに獲物を探したというから驚きです。

カンテラは欠かせない

夜灯の道具



カンテラ正面
発火によって発生した光を拡散させる反射板。

カンテラ側面
上段に水、下段に燃料のカーバイトを入れる。

フクバエ→
魚を入れるカゴ。棒に通じて2人で運ぶ。

↑ヤス
魚を突く槍。左がハゼなど主な魚に、右はエイやマグチなど大きな魚に使った。

夜灯ぼし漁に使われた「カンテラ」は、現在の稲毛で毎年開催している「稲毛あかり祭」夜灯」で街中に灯す灯籠のモチーフにもなっていますが、

「カンテラ」って一体どんな道具だったのでしょうか？稲毛の夜灯で使われたのは、専らカーバイトランプでした。このランプは、容器の下段に燃料となる炭化カルシウム(Calcium carbide)を入れ、そこに上段の水が一定間隔でポタポタ落ちること、強烈な光を継続的に放つアセチレンガスが発生するという仕組みを持ちます。それをヤスと呼ばれる槍で突いて獲ったそうです。

カンテラ片手に魚を探るときは、水面に波が立つと水中が見えにくく、さらに魚が起きてしまうので、1〜2人の少人数で静かにそ〜と歩いて探さねばなりません。

獲った後のお楽しみ

さて、夜灯でたくさん獲れた魚たちはどんな風に食されたのでしょうか？特に大漁だったハゼは一度に食べられないほどだったので、多くの家庭では、ハゼのはらわたを取り、素焼きにして乾燥させ保存食にしたそうです。このハゼの素焼き、カツオ節と比べあっさりとしたいいダシがでるので、日頃お吸い物に使ったり、正月には甘露煮にしてお正月の昆布巻きにして食べたそうです。

他にもあるある夜の漁

上の写真は、夜灯とは逆に満月の夜の稲毛の風景です。写真に写る船は漁船でしょうか？



③ 稲毛海岸の夜景を写した絵葉書

実は、夜灯以外にも稲毛では夜の漁が色々あったようです。例えば、夜のハマグリ漁。大潮の月夜の晩、潮の引き初めにハマグリが長い「ヌルメ」を出して沖の水中を移動するそうです。素足(スネ)に当たるハマグリの「ヌルメ」を頼りに潮の流れを読み、ハマグリの行先を辿るといって達人級の漁です。

また夏の夜のカニ漁もあり、ゆでカニは子供たちのおやつ定番だったそうです。稲毛ならではの漁は他にもまだあります。情報求む!

噂の真相!?

海竜王と三柱鳥居の謎

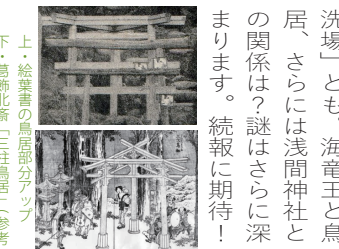


「海竜王の祠」という祠があります。大正6年に同地に別荘を建てた神谷伝兵衛の碑によれば、天保時代の中頃から海竜王が祀られており、そこには湧き水が湧き、眼病を患った者がその水で洗うとたちまち霊験があったらしいのですが、それ以上のことはわかっていません。

そんなある日、祭祀学研究会の藤田穂高氏より連絡があり、根岸榮隆氏「鳥居の研究」(昭和18年)に、稲毛の海岸の別荘地に、崖からチヨロチヨロと水が流れ落ち、そこには全国でも珍しい「三柱鳥居」があると書かれているとのこと。藤田氏によれば、「三柱鳥居」は3本の柱を持つ不思議な形をした鳥居で、由来も含め謎が多く、京都の木嶋神社が有名ですが、他にもわずかに見られるとのこと。海岸段丘沿いで昔湧き水が湧いていた当館を訪ねてこられたという経緯です。



④ 大正7〜昭和8年の稲毛の海竜王祠が写る絵葉書



上: 絵葉書の鳥居部分(参考) 下: 葛飾北斎「三柱鳥居」(参考)

●本号の夜灯特集は稲毛在住の長谷川幸雄さんのお話を元に編集しました。●画像は、藤川勇氏撮影、②新井英夫氏撮影、千葉市立郷土博物館、③④加藤博仁氏撮影、⑤コレクション(同博物館)より提供いただきました。●カニは長谷川氏所蔵。ヤスとフクバエは旧生浜町役場庁舎に展示されています。皆様ご協力ありがとうございました。

千葉市
民ギヤ
ラリー・い
なげの駐
車場には
昔から